

會堂

二十四回入選作品

75

NOTE BOOK

WITHOUT EFFORT, ONE IS SURE TO FAIL

芭蕉と山形県

六ノ二

伊藤明彦

CONTAINING BEST RULED FOOLSCAP
MARUKYO'S <YÔ> NOTE



TOKYO

3T A 50

目次

一、	研究	を	始	め	た	動	機
二、	芭蕉	の	生	い	た	ち	
三、	芭蕉	と	非	諧	の		
四、	芭蕉	地	方	へ	の	旅	の 動機
五、	東	尿	前	の	関		
六、		尾	花	沢			
七、		山	寺				
八、		大石	田				
九、		羽	馬	山			
十、		月	山				
十一、		湯	殿	山			
十二、		鶴	岡				
十三、		酒	田				
十四、	酒	田	大	山	一	温	海
十五、	ま	と	め		一	念	ヶ
十六、	感	想				関	

研究を初めた動機

ぼくは、四年の時、山寺の研究をした。そのときに、芭蕉が山寺で作ったはい諧があった。その時でも芭蕉はどんな人だろうと思っていた。でもその時は、夏休みで宿題がたくさんあったので、ちょっとやる気がなくてしなかった。そういうことと、どういふことで芭蕉は、はい句を作ったか、まじぎ問に思ひこの研究をはじめた。まじめにやりよい研究にしたい。

芭蕉のおいたち

松尾芭蕉は、今から三百年あまり前、
伊賀の国（今の三重県）の、上野の赤坂
松尾の家に生れた。芭蕉の父は与三、
母は左衛門の女。芭蕉は三つと女衛門、
左衛門の一人が、その弟衛門宗房、
宗房は幼名を藤が、
伊賀の国（今の三重県）の、上野の赤坂
松尾の家に生れた。芭蕉の父は与三、
母は左衛門の女。芭蕉は三つと女衛門、
左衛門の一人が、その弟衛門宗房、
宗房は幼名を藤が、
伊賀の国（今の三重県）の、上野の赤坂
松尾の家に生れた。芭蕉の父は与三、
母は左衛門の女。芭蕉は三つと女衛門、
左衛門の一人が、その弟衛門宗房、
宗房は幼名を藤が、

芭蕉と俳諧

寛文十二年（一七二二年）宗房は上野の
文である。松尾忠衛門宗房は上野の
城で藤良忠の性をつとめていた。俳諧が
好きだった。同じ趣味が、良忠と宗房を親
しくさせた。その良忠がとつぜん死んでしまっ
た。宗房は、武士としてつとめをはたす気も失
った。道に迷った。宗房は迷いに迷った。あ
げく、江戸に出てきた宗房は、知人のせわ
で、鯉屋という魚問屋に居候になった。
江戸では、談林派という一派が栄え
西山宗因をはじめ、名高い宗匠（俳諧の先生）
がたかさんいた。宗房は生活もたてね
ばならないので、いろいろなことをや
みた。小石川関口に水道工事が始まって
いた。そこにつとめた。つとめもあつた。また駿
河台のある屋敷の、文庫番などもした。
しかしそれもすぐやめてしまった。からだ
が弱くて、耐えられなかつた。勉強
が、おそろしくなるから。宗房は、
本をたくさんよんで勉強した。大流
行の談林派の俳諧は、おもしろ
い。ことおかしなことをうまい句調で
作ることが俳諧だと聞かされて、
それが本当の俳諧なのだろうか。宗房に
は正しい俳諧の道があるように思われ
て、夢中になって俳諧の研究をした。

東北地方への旅の動機

奥の細道足跡図



芭蕉は新しい旅に出た。江戸から西は、もつ何回もでかけた。たんとは、江戸から東北、奥羽地方に行ってみたいものだ。芭蕉は奥羽地方はまだ開けていかなかった。道も悪いし、関所とおるのもむずかしい。元禄二年(一六九九年)になり、芭蕉は四十六才になった。もう人々から「翁」とよばれている。かみは白くこしはまがりがけしている。曾良が自分が供をしたいと申し出た。三月二十七日、芭蕉は深川を舟でた。芭蕉も曾良も坊さんのなりをして、いれた。その方が宿をかりるときも、関所をとあるときも、便利だ。かちである。

尿前の関 五月十五日通過

芭蕉は、平泉から道をもとじ、五月十四日、一の関を出発。岩崎、一葉を経て、十四里を歩き、岩手山に泊った。その目的は、岩手山、一中新田、小野田、軽井沢、一銀山を経、尾花沢に出る予定であった。ところが、銀山の役入が通行人に重い税を課するといふ。ついに伝わって、たので、急に尿前の関をとあることに変更した。十五日、岩手山から西に進み、小黒崎鳴子をとおり、尿前の関にさしかかった。ここで芭蕉は、

蚤虱馬が尿する 枕もと

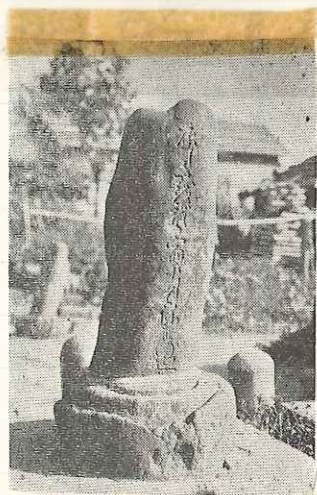
この句は、静かな深夜に幾匹かの馬の尿の騒音が自分の枕もとで、滝のような現実をかん入してこのような句が生まれたのだらう。

尾花沢 五月廿日～五月二十六日

尾花沢で芭蕉は、旧知の鈴木清風
にたよって、十日ほど滞在した。
まゆはきを俤にして、紅粉の花
などという句も作っている。
芭蕉が尾花沢へついていた五月十
七日は、新らしくに直すと、七月三日
つまり半夏生の翌日なのだ。
から滞在中は、ベニバナの盛り
であり、ベニバナ摘みの盛りの
ときであつた。
その忙しい最中に芭蕉は尾花
沢におとすれた。

涼しさを 我が宿にしておくる也

この句は、旅の情を知る清風(芭蕉)の
行きとどいたもてなしによつて、
行涼しくくつろぐことができたといふ
涼しさの意味をあらわしている句で
ある。



「涼しさを」の句碑

山寺 五月二十七日

立石寺のある村を山寺といつて
いる。別に歌枕というわけでもな
いから、芭蕉はいくつものなれ
か、たのだから、清風にすすめられ
て、行ってみる気になつて、名句
を生んだ。

閑けさや 岩にしみ入る 蟬の声

とてもしずかで、岩にしみ入ってくる
ように、蟬の声だけが、高くきこえる
ということを表わしている句だ。



「閑けさや」
の句碑

大石田 五月二十八日～五月二十九日

山寺で一夜を明かした芭蕉と曾良は、五月二十八日ここを出発し大石田に向かった。芭蕉が大石田に着いたのは午後の三時だった。芭蕉は俳人であつた。高野平右衛門が迎えられた。その日は芭蕉と曾良は休む。翌日、芭蕉、曾良、一栄、川水の四人でかけかけた。

五月雨を集めて涼し 最上川

ここで芭蕉が集めて涼しといふのはあるじへのあいさつで、数年後には、集めて旱しと直した。



→大石田
付近の
最上川



→芭蕉がと
また一栄
宅跡

羽黒山 六月三日～六月五日

芭蕉は、三ヶ尺一添川を経て、出羽に
三山参道の芋向村に着いた。
芭蕉は、まず紺屋を本業としてい
た。近藤左吉をたずねた。左吉は
突然、芭蕉があとすれたのに、びく
りしたが、芭蕉があとすれたことを
光榮に思い、とく別のもてなしをする
ことにし、南谷の別院に案内をした。
芭蕉と曾良はこの日は、左吉の心か
らのもてなしでゆっくり休んで旅のつ
がれをほくした。
翌四日は、本防で俳偕の句てい
がひらがれた。
ここでの芭蕉の立句は、

有難や雪をかほらす 風の音、

だったが、後に、「雪をかほらす南谷
とした。この句は、左吉たちの心か
らのもてなしと、情まやかなの
に感謝の気持ちを表現した句で
ある。

涼しさや ほのみか月の 羽黒山

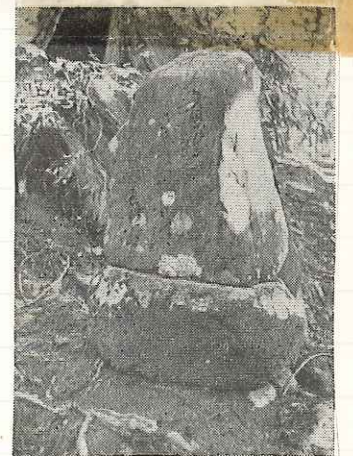
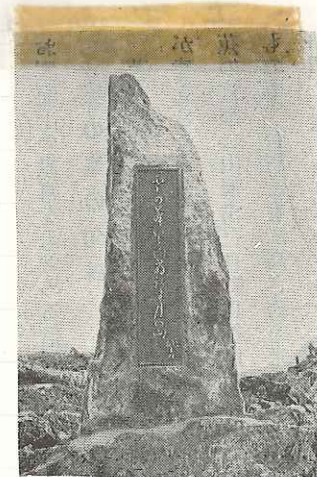
この句は、芭蕉が月山と湯殿山の参詣
を済して、羽黒山の静寂な夜景
と涼しさに感たんした句である。

月山 六月六日

芭蕉と曾良は月山と湯殿山を参詣す
べく、五日の夕暮から祐奇堂にこ
もり精進して身をきよめ、六日早
朝修道のおきてに従い、白衣の
行者となって、強かに案内されて
参道にむかって出発した。

雲の峯 いくつ崩れて 月の山

この句は、月山の頂上でよん
だ句で、雲の峯の高い月山の
雄大なようすをあらわした
ものである。



「雲の峯」の句碑 「有難や」の句碑

湯殿山 六月七日

芭蕉と曾良は、月山の頂上で、夜明けを待って、湯殿山にくだった。

かたられぬ 湯殿にぬらす 袂かな
「かたられぬ」とあるのは昔は湯殿山の神秘は他言いある。

鶴岡

芭蕉と曾良が南谷の別院をたつたのは六月十日である。と中雨。芭蕉は、午後五時ごろに長山五郎右門重行宅についた。この日は芭蕉は、体の具合が良くなかったため、その日は俳諧一巡しただけで終りになった。

芭蕉は翌十一日持病のため句をいはず中止になった。翌十二日、重行宅で句をいが行なわれた。ここでの立句は、

珍らしや山をいで羽の初茄子
だった。この句は、重行宅で名物の青むらさきで歯切れの好いた、節物の茄子の風味が忘れがたく、その厚意に対し感謝の意を表わした句である。

六月十三日、芭蕉は市内を流れて、内川の船客となって、酒田に向かって出船した。

酒田

芭蕉ののた船は、下流で京田
川を治し、最上川の本流に入た。
芭蕉は、最上川の河港から上陸
し、俳人である。潜淵庵不玉伊東玄
順亭をたずねた。
翌十四日、芭蕉と曾良は、不玉の
とりなしで、酒田港浦役人をつと
めしている、寺島彦助亭にいうた
いされ、この日、句ていがあつた。
ここでの芭蕉の立句は、

涼しさや、海に入れたり、最上川

この立句は、後に「暑き日を海に
入れたり最上川」となつた。

二十一日、芭蕉、酒田、伊藤玄順亭
にてこの句を作つた。

温海山や、吹浦かけて、夕涼

この句は、海上を見わたして、まこと
に雄大そのものの名句といえる。

酒田ー大山ー温海ー風ヶ関

芭蕉はここで酒田を一時あとにまわ
し、待望久しかつた象湯のた
風光を先に、観賞することにした
ものであろう。
翌十五日には、不玉宅を出発し、
途中荒天になやまされてやむな
く吹浦に一泊つぎに象湯に二泊
と旅ねをかきね十八日再び不玉
宅に迎えられた。
芭蕉と曾良が別れをおしみ、酒
田を立つたのは、六月二十五日、未刻
(午後二時)大山に辿りつゝ、丸屋
(義左衛門名に泊。翌二十六日芭
蕉と曾良は大山を出発して、温
海に向かつた。鈴木所左衛門宅
に一泊した。六月二十七日いよいよ
芭蕉と曾良が出羽路と袂別木
の温海に泊る。芭蕉は、馬で、約
二里の鈴木の湯本
家関を見聞ぎし、折返して芭蕉の後念
を珠貫を待つ約束をしてあつたのだ

出羽路に芭蕉しのぶ

俳聖芭蕉の行脚した本県の「奥の細道コース」が静かなブームを呼んでいる。日本の伝統芸術の心を伝えるこのリバイバルムーブに、つてか史跡を訪れるひとがめ、きりふたきた。関係市町のなかには草につるれた旧道を整備、これを機会に芭蕉ゆかりの地として記念館設立の議論が高まっている。

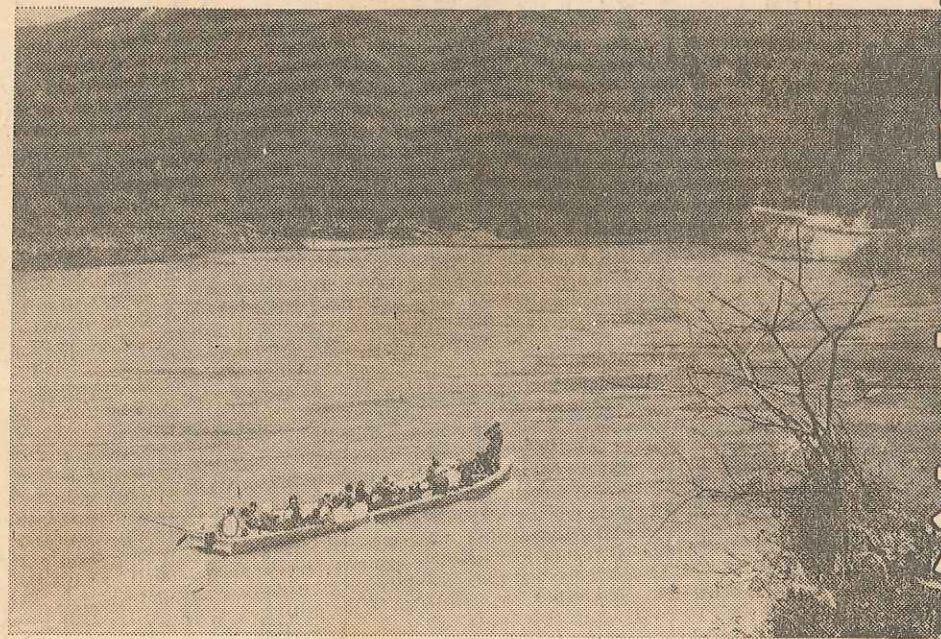
騒音のがれどつと

全国からファン コース整備急ぐ

芭蕉は江戸時代の元禄二年に江戸を出発、東北をひとめぐりした道のは全延長が二、千五百時。このうち本県は約三百六十で、宮城県側から最上町にはいり、尾花沢、山形、新庄、鶴岡、酒田の出羽路をめぐっている。本県の場合ほとんど滞在日数が多かったといわれ、「蚤虱（のみしらみ）寺では年間一万二、三千人の訪問客があるという。東京の大学生、貸し切りバスの修学旅行組、芭蕉研究グループ、俳句ファンなどの人気を集めている。芭蕉研究家で全国的に有名な社員東海林隆さん（東根市）には道案内や名所旧跡の説明、問い合わせなどが殺到している。

ぜひほしい記念館

この半町、受け入れ体制はまだ。四十二年にコース沿いの十三市町村、県観光協会、出羽三山（会長＝奥山尾花沢市長）では、これまで観光宣伝用の小冊子を配布したり、句碑の設置などを行な



人気集める

俳聖の道

まとめ

芭蕉の江戸時代元禄二年に江戸を出発、東北をひとめぐりした道のは全延長が二、千五百時。このうち本県は約三百六十で、宮城県側から最上町にはいり、尾花沢、山形、新庄、鶴岡、酒田の出羽路をめぐっている。本県の場合ほとんど滞在日数が多かったといわれ、「蚤虱（のみしらみ）寺では年間一万二、三千人の訪問客があるという。東京の大学生、貸し切りバスの修学旅行組、芭蕉研究グループ、俳句ファンなどの人気を集めている。芭蕉研究家で全国的に有名な社員東海林隆さん（東根市）には道案内や名所旧跡の説明、問い合わせなどが殺到している。

芭蕉の江戸時代元禄二年に江戸を出発、東北をひとめぐりした道のは全延長が二、千五百時。このうち本県は約三百六十で、宮城県側から最上町にはいり、尾花沢、山形、新庄、鶴岡、酒田の出羽路をめぐっている。本県の場合ほとんど滞在日数が多かったといわれ、「蚤虱（のみしらみ）寺では年間一万二、三千人の訪問客があるという。東京の大学生、貸し切りバスの修学旅行組、芭蕉研究グループ、俳句ファンなどの人気を集めている。芭蕉研究家で全国的に有名な社員東海林隆さん（東根市）には道案内や名所旧跡の説明、問い合わせなどが殺到している。

感想

ぼくは、この研究をやった芭蕉、
が山形県で作った俳諧のことで、
の俳諧の意味がしらぬ。最初、
とほまじめにやっていたが、後、
てから、少し不まじめになった。
後の研究にしては少しものた
りなかつた。この研究を勉強に
役だてていきたい。

資料になった本
芭蕉と出羽路 早坂 忠雄著

東北

小学館

江戸時代に活やくした偉人